

論文の内容の要旨

小形舟底形石器を伴うアセンブリッジを担った北海道後期旧石器時代狩猟採集民の地域適応：
石器技術分析と居住形態分析を通じて
(Lithic technology, settlement mobility, and regional adaptation of the Upper Paleolithic
hunter-gatherers with the small boat-shaped tool assemblage in Hokkaido)

尾 田 識 好

はじめに

酸素同位体ステージ2の北東アジアに広く展開した石器群は、細石刃製作技術と骨・角・牙の軸に細石刃を装填する植刃技術に特徴づけられる。北海道においては概ね21,000～10,000 ¹⁴C yr BPにかけて展開し、石器製作技術、石器形態、石器組成、遺跡構造といった個々の遺跡に立ち現れるさまざまな現象に多様性を孕んでおり、大きな環境変遷の枠組みに対応して発生・成立・発展・変容・解体・消失していたことが明らかにされつつある。

こうした北海道の細石刃石器群にしばしば伴うのが舟底形石器で、特に後期細石刃石器群期(13,500～10,000 ¹⁴C yr BP)に発達する。この時期は概ね晩氷期に相当し、一部は後氷期初頭に及ぶ可能性がある。当該期には舟底形石器をはじめとしていくつかの細石刃核および細石刃製作技術に特徴づけられるアセンブリッジが属する。これらを担った狩猟採集民の技術的・文化的・社会的適応行動の解明が、人類史の大きな画期となるこのユニークな時代を読み解く上で重要な意味を持つ。

第1章 北海道における舟底形石器の様相

公表されている北海道の細石刃石器群を対象に舟底形石器を集成したところ、2013年12月現在96遺跡148地点(ブロック群・スポット群)において約1,000点の出土を確認することができた。前期後葉細石刃石器群期(15,000～13,500 ¹⁴C yr BP)から北東部の遺跡を中心としていくつかの細石刃アセンブリッジに副次的要素として伴う一方、後期に主に北東部・南東部・南西部に舟底形石器およびその製作技術に特徴づけられるアセンブリッジ(小形舟底形石器1類・同2類)が出現する。

第2章 研究史

舟底形石器については、資料が急増した1990年代後半からその編年的・年代的位置づけ、および形態と機能について活発に議論されてきたが、これは「遺物分類」と「道具分類」という比較の上では相当に錯綜とした様相をみせる石器である。分析する上で留意すべきことは、技術形態的視点による「遺物」としての舟底形石器と、生活の場で使用された「道具」としての舟底形石器とを意識的に区別しなければならないことである。既存の石器の記述・認識の方法と分類カ

テゴリーを再検討し、道具としての舟底形石器の機能を評価した上で、それを用いた狩猟採集民の技術的・行動的パターンを読み取る必要がある。

第3章 分析対象および視点と方法

小形舟底形石器アセンブリッジ（1類・2類）を分析対象とする。前者には 13,500 ¹⁴C yr BP 前後の年代が、後者には概ね 13,000 ¹⁴C yr BP 以降の年代が想定されており、11,000～10,000 ¹⁴C yr BP に顕在化した可能性が高い。本論では両者に時期差を認め、前者から後者へと変遷したと考える。両アセンブリッジは技術的・形式的に系統関係にあるとみられ、以下の分析と議論はこのことを前提とする。

舟底形石器の機能は巨視的には特定の時期や地域、微視的には個々の遺跡（場）のコンテクストに強く依存していたと考えられ、そうした機能は石器の形態からでは直接に理解することは難しく、当時の狩猟採集民の行動的コンテクストを明らかにした上で評価しなければならない。そのために、本論では（1）リダクション・シーケンス分析（石材調達から石器製作の初期工程、素材生産[プライマリー・リダクション]、ツール製作と調整[セカンダリー・リダクション]、使用を経て放棄に至る過程）と、（2）石器を道具として用いた行動を追究するための石器組成分析を通じて遺跡間の機能的な関係を明らかにした上で、（3）舟底形石器の製作・運用パターンを重ね合わせ、そのコンテクストにおいて舟底形石器の機能を解釈する。さらに、（4）それらを踏まえた上で、当該狩猟採集民の居住形態をモデル化し、比較検討する。

第4章 小形舟底形石器1類を伴うアセンブリッジの居住形態

当該アセンブリッジは、次の類型に分けて把握することができる。主に黒曜石を用いた高度な石器製作技術を持ち遺跡からの搬出が活発で、ツールの種類と数量が比較的多い遺跡（A類）、主に黒曜石を用いた簡易的な石器製作技術を持ち遺跡からの搬出が主体的に行われるが、ツールの種類と数量があまり多くない遺跡（B類）、主に非黒曜石による簡易的な石器製作が活発に行われ、種類が豊富で多数のツールを有する遺跡（C類）、石器製作の痕跡は希薄で、ツールの種類と数量がいずれも少ない遺跡（D類）。

大形舟底形石器Ⅰ類は、ツールの種類と数量が少ないD類遺跡において「彫器」や「削器」、「小形舟底形石器」（細石刃核）として使用される「運搬形態」としての道具であったと解釈される。また、地域内に産出する幅広い範囲の形質の石材を用いて、大形（Ⅱa類：「原形」）から小形（1類：「細石刃核」）の舟底形石器が適宜製作されている。

当該狩猟採集民は、北東部と南西部を中心に、相対的に狭い地理的範囲内を周回的に移動し、その中に特定の作業を行う兵站的移動を組み込んで、資源を開発していたと推測される。居住地移動の距離は相対的に小さく、兵站的な地点はしばしば重複して利用されていたと考えられる。

第5章 小形舟底形石器2類アセンブリッジの居住形態

様相が複雑で遺跡の類型化が困難だが、当該狩猟採集民は黒曜石産地（白滝・十勝平野中部）に近接する大規模な居住地（そこでは一連のリダクション・シーケンスがみられ、ツールの種類が豊富で数量が非常に多い）から、ほぼ同じ種類の石器を携帯して放射状に地域資源を開発し、かつ短期的な移動と同一地点への回帰的行動とを頻繁に繰り返す居住形態をとっていたと考えられる。居住地は北東部の白滝黒曜石産地―十勝平野中部地域間等の相対的に長距離を大きく移動するため、兵站的な開発領域は重複しない。

舟底形石器は大形（主に IIa 類：「原形」）から小形（2 類：「細石刃核」）へのリダクションにほぼ限られ、機能が特定化する傾向にある。なお、北東部の遺跡では石器石材に赤褐色黒曜石が多用されている。

第 6 章 議論

本論の目的に照らして考察すべき課題を 2 つ設定して議論した。

- (1) 小形舟底形石器アセンブリッジの舟底形石器は、技術形態的・機能的にどのような特性を持っていたのか。

舟底形石器と技術形態的に相似する両面調整体との比較検討を通じて、①形態形成が比較的容易である、②他のツールの素材供給を担うことは稀で、それゆえ極めて石材浪費的な側面を持つ、③他のツールとの素材の共有が難しく、舟底形石器自体を一定の形態にリダクションすることはできるがその可能範囲が狭いため、多用途性・融通性が比較的低い、という結論を得た。こうした舟底形石器は両面調整体に比べて長距離・広範囲の移動時に携帯するにはあまり適合せず、それゆえ前期細石刃石器群期に比べて相対的に狭い範囲を兵站的に移動する傾向が高まった後期細石刃石器群期において発達したと考えられる。

- (2) 小形舟底形石器アセンブリッジの成立と変化の背景はどのようなものだったのか。

当該狩猟採集民の居住形態に、地形環境と資源環境を組み合わせで議論した。北東部と南西部は複雑な地形環境を背景として食料資源が多様で、石材資源（黒曜石・非黒曜石）にもアクセスしやすい一方、十勝平野（南東部）と石狩低地帯南部（中央部）は単一的な地形環境のため資源環境が単純であり、石材の一次産地から離れている。

そのため、小形舟底形石器 1 類アセンブリッジを担った狩猟採集民が積極的に資源を開発したのは、北東部と南西部である。他の細石刃アセンブリッジではほとんど利用されない珪岩やメノウといった石器製作のコントロールが難しい石材を、舟底形石器の形態形成の容易さを生かして運用したことにより新たなニッチを確立し、地域内の多様な食料資源を効果的に開発したと考えられる。

小形舟底形石器 2 類アセンブリッジを担った狩猟採集民は北東部、南西部に加えて十勝平野も生業経済域とし、それぞれ放射状に資源開発を行っている。その背景には地域資源に関する知識の蓄積に基づく予測性の向上があったと考えられる。ただし、石狩低地帯南部地域は石材資源の乏しさからか、居住痕跡は希薄である。また、北東部における特徴的な石材利用は、地域の固有化の進行に伴う彼らのアイデンティティの確立を反映しているものと思われる。当該アセンブ

リッジは、年代的には晩氷期終末のヤンガー・ドリアス期から後氷期初頭に位置づけられるので、おそらく彼らはヤンガー・ドリアス期の環境にも技術的・文化的・社会的に適応し、後氷期初頭まで存続したと想定される。

第7章 結論

本論の結論は、次のようにまとめることができる。

- (1) 舟底形石器の技術形態的・機能的特質は、両面調整体比べて長距離・広範囲の移動戦略にはあまり適合せず、それゆえ前期細石刃石器群期に比べて相対的に狭い範囲を兵站的に移動する傾向が高まった後期細石刃石器群期において発達したと考えられる。
- (2) 小形舟底形石器1類アセンブリッジを担った狩猟採集民は、晩氷期の激しい気候変動の中、多様な生態系を網羅的に利用することが可能な地域において、その資源を多角的に開発するための居住形態を発達させたと考えられる。そこでは形態形成が容易なために幅広い範囲の形質の石器石材に適用可能な舟底形石器が大きな役割を担っていた。
- (3) 小形舟底形石器2類アセンブリッジを担った狩猟採集民の居住形態は、地域資源に関する知識の蓄積に基づく予測性の向上を背景として成立したと考えられる。
- (4) 当該狩猟採集民は、晩氷期から後氷期初頭において石器技術を大きく変更することなく、地域環境に適応したと考えられる。このことは、晩氷期から後氷期初頭における地域固有の技術および石器スタイルの構築を通じた地域適応プロセスを表している。